

センター通信

第257号

2009年1月20日発行

名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニープル新栄301号
郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>



9月27日のMarieさん前列左から2人) の歓迎会 gasto, infanoj 含めて11名

Marie-France Conde Reyさんは2008年9月27日センターを訪問。あまり聞き慣れない用語を用いて "Esperanto-Civito" という世界的組織についてメモコピーや白板を使って話した。つづいて歓迎の夕食会。名古屋でパスポルタセルボに登録している Kadoja Hidenori さん宅に宿泊した。その後、和歌山で開かれた日本エスペラント大会にも参加した。

彼女の講演はフランスなまりのない静かに、そして熱のこもった話しっぷりだった。れっきとした市民権を持った人々で構成する エスペラント国について話してくれた。

"Esperanto-Civito"は、憲法を持った国であり、議会、裁判所を持つ。国土のない Raŭmismo (少数派言語による自主的離散共同体とでも言おうか) を標榜しスイスに銀行口座を持つ。Transnacia ne teritorie, nek sange と言っていた。国旗は緑星旗であり、国歌はLa Espero なのだそうです。

中垣虎児郎文庫の消息

熊木秀夫さん（神奈川県川崎市在住）が三ツ石清さんを訪問したときの様子の中垣虎児郎文庫の消息について寄稿していただきました。熊木さんは、1947年からの鉄鋼労働者エスぺランチストです。ベトナム・ハノイに点字図書館を作ったときのプロジェクトマネージャーとして活躍しました（2004年1月－9月）。日本インターネット新聞 JanJan の市民記者としても活動しています。（編集者）

2007年の11月、由比忠之進焼身抗議40周年記念集会の後、竹崎睦子さんと名古屋市中川区の「第2共愛の里」に三ツ石清さんを訪ねました。そこには、電子表意盤（あいいうえお順に文字盤があり、それを指で押して意志表示をする器械）が置いてあり、それで会話を試みましたが三ツ石さんはその操作もできない状態でした。近くにいる人が小まめに接しないと何も聴き出せない、という状況で細かい話のやり取りは断念しなければなりませんでした。

そのとき、三ツ石さんは、そばにあったダンボールの大きな箱を指差したので、かき回してみましたが、中垣さんの資料や見るべき資料はありませんでした。

三ツ石さんは長年、名古屋市中川区にある市営の春田住宅に住んでいました。この中垣さんとは、中垣虎児郎のことで、この人が残していった書籍などを三ツ石さんが「中垣虎児郎文庫」として引取っており、その中には柴田巖さんのお話によると、柏木ロンドの手書きの回覧雑誌など、この世に一冊しかない文献が少なからず含まれていたそうです。柴田さんは、今日本エスぺランティスト人名辞典を編集している人で、「中垣虎児郎伝」としてその人生を克明に追求している方です。

『中垣虎児郎伝』は(1)が2000年に、(2)が2001年に、(3)が多分2002年に、千葉工業大学研究報告人文編として第37号、38号、39号として発行されました。その中身については来年の日本エスぺラント大会の終了後、山梨エスぺラントの家で研究懇談会を催し、そこで柴田さん自身から発表してもらう予定で、すでにご本人から了解をえています。

中垣虎児郎の著作には、『翻訳実験室』（KLEGが再版）、『徳永直の豊年飢饉（Malsato en riĉa rikolto）』などがあります。この本は翻訳実験室の試みを実践したもので、日本人の生活をエスぺラントで表現するためにとてもよい教科書です。そのほか『エスぺラント初等講座』（1949年）があります。

Nekrologo

三重エスぺラント会の森嶋正武さんが2008年3月に亡くなられたそうです。享年97歳。伊勢市にお住まいで、戦前からのエスぺランチストです。先日年賀欠礼のはがきをいただきました。お電話で弔意をお伝えし、貴重な蔵書を拝見させてほしいとお願いしました。（山本修）

高杉一郎と長谷川四郎との邂逅について

伊藤俊彦

先日、鶴見俊輔『悼詞』を読みました。本書は、同時代の作家、研究者などで著者と親交のあった有名、無名の人物120余人に対する鶴見の追悼の言葉を集大成したもので、高橋和巳、富士正晴、松田道雄、林達夫、丸山真男など、私もその著作に親しんだ人たちの名前も見受けられ、感慨に誘われます（S U R E、2008年刊行）。

そのなかに、長谷川四郎への追悼文が収録されています。長谷川はシベリアに抑留され、そのときの体験を踏まえた、いい短編がいくつかあります（さしあたり、『シベリヤ物語』、『鶴』など参照。いずれも講談社文芸文庫所収）。

さて、『悼詞』には、長谷川自身が書いた文章が引用されていて、なかなかいい話なので、ご紹介しましょう。彼が、やはりシベリア帰りの高杉一郎の自宅を訪問したとき、ちょうどロンドンから来たイギリス人の女性エスペランチストが来ていて、高杉とふたり、エスペラントで話していたが、長谷川はエスペラントを解さないので、その会話の内容はほとんど理解できなかった。しかし、やがて三人で「マイ・ボニー」、すなわち「『わたしのボニーは海のむこう』という、おそらくは帰ってこない兵隊を歌った歌」を歌ったと記しています。

「マイ・ボニー」はスコットランド民謡なので、その女性がスコットランドの人かどうか分かりませんが、英語で歌ったのでしょう。鶴見は「もとシベリア捕虜の二人の白頭翁が、イギリス婦人とともに、『マイ・ボニー・イズ・オウヴァー・ジ・オウシャン』を合唱するところがすばらしい。それぞれが、自分の心の耳で、さらに自由なもうひとつの言語をきいていて、それこそ、今すでに存在している国際語ではないだろうか。」と評しています（p 149～150）。

あらずもがなの蛇足。「マイ・ボニー」のメロディーに全然別のエスペラントの歌詞をつけた、La lingvo por ni という曲が、かつて合宿などで歌われていた記憶があります。ただ、En densa afrika ĝangalo, sovaĝaj nigruloj sen Di' などという、黒人に対する白人の差別意識、優越意識丸出しの歌詞でした。だから、今はあまり歌われることはないのかな、と思います。

なお、この曲のエスペラントの歌詞は Wikipedia (Vikipedio) に収録されています (http://eo.wikipedia.org/wiki/La_lingvo_por_ni)。また、ネットで調べたら、柴山純一さんが「歌と差別」というタイトルで、「エスペラント探語帳」のなかで言及されていました (<http://d.hatena.ne.jp/sibazyun/20060112/1137079929>)。

Zamenhofa Festo 08

Estis malfermita posttagmeze de la 12a decembro 2008 en 名古屋市東生涯学習センター gvide de IKAI Yosikaz.

S-ro Bill Mak (マク・マンビュ 麦文彪) prelegis kaj ludis ĉinan kordinstrumenton. Prelegis “Antikva Klasika Muziko de Gukimo (Gugin)” kaj prezentis la muzikpecojn per Gukimo. “Tri variaĵoj de prunfloroj”, “Harmonio de la Senmortuloj”, “Cignoj malleviĝantaj sur Trankvilan Plaĝon” estis prezentitaj.

Post komuna fotado Tadaŝi JAMADA gvidis kelkajn kantojn kun pianakompano de Bill Mak, kaj SUGIHARA Tadashi prezentis sian komponaĵon de ŝakuhaĉo kun akompano de movbildoj. Post prezentado de libroj de NAGASE Yosikatu, ni iris al Nagoja Esperanto-Centro por bankedo.



Partoprenantoj kaj la instrumento gukimo



S-ro Bill Mak ludas gukimon



S-ro sugihara kun fluto ŝakuhaĉo kaj movbildo

La Antikva Klasika Muziko de Gukimo (Gugin)

6an Decembro, 2008. Nagoja, Japanio

Bill Mak



Tri variaĵoj pri prunfloroj 梅花三弄 (13a jc.)

Uun el la plej ŝatataj melodioj de antikva Ĉinio, la “Tri Variaĵoj” simboligas dignon kaj noblecon. La prunfloroj blankaj (aŭ mej-floro en la ĉina) ekfloras dum vintro malgraŭneĝe. Kune kun pinarbo kaj bambuo, ili estas konataj kiel la “tri amikoj de vintro”. La mej-floro estas antikva flor-emblemo de la urbo Nanjing kaj ankaŭ la siatempa respubliko de Ĉinio.



Harmonio de la Senmortuloj 神人暢 (8a jc. ?)

Laŭlegende komponita de la antikva Reĝo Jao (2400 A.K.), la nekutima harmonio de la “Senmortuloj” kun ties modala kaj punkteca sono sugestas sian antikvecon. Per muzika formalismo la antikvaj ĉinoj esprimis la harmonian rilaton inter la kosmo kaj la homo. Se vi zorgeme aŭskultas, vi povas rimarki la matematikan strukturon kiel la Pitagoran kvocienton esprimitan de la harmoniaj supertonoj de la gukimo.



Cignoj malleviĝantaj sur Trankvilan Plaĝon 平沙落雁 (17a jc.)

La “Trankvila Plaĝo” estas nepra ero de la tradicia gukima repertuaro. Ĝi komencas per trankvilaj supertonoj kaj la melodio transformiĝanta kvazaŭ flugas. La “Trankvila Plaĝo” diverssente prezentas la ĉinan astetikon de paco, trankvileco kaj meditemo.

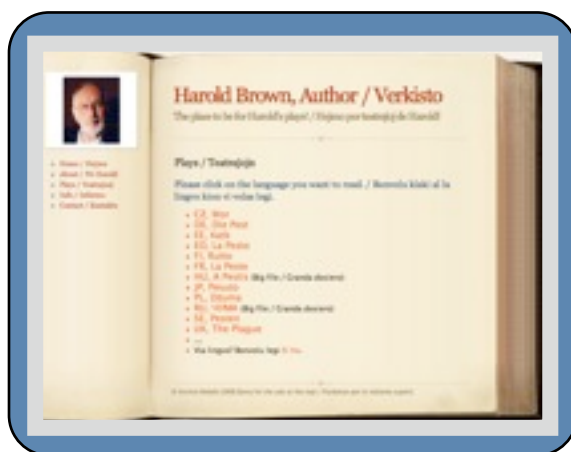
センター委員の働きを紹介…

センターの鈴木善彦は（財）愛知県国際交流協会の情報担当へ、名古屋エスペラントセンターは今年も引き続き、「国際交流ハンドブック」へ掲載するよう申し入れた。昨年度と同じだが、会員数は2008年3月末で54名と増加していることも知らせた。

伊藤俊彦は、Revue Orienta 2008-11 に「わたしの読んだ本」で『わたしのスターリン体験』『若き高杉一郎』について寄稿した。

Revue Orienta 2009-1 の「わたしの読んだ本」では山田義が、『広がる平和のウェーブ「われら愛す」II』について寄稿した。

Harold Brown (1925-2004) の La Pesto の日本語訳を山田義と伊藤俊彦がやりとげた。山田が2008年ベツピルスで知り合った原作者の奥さんから日本語の翻訳を頼まれた。だれか力のある人を探すべきだったが自分で翻訳しはじめたが結局、伊藤俊彦さんに完成してもらった。原作者の遺族管理のホームページ上でそれぞれの訳がPDFで読めるようになっている。今は、チェコ語、ドイツ語、エストニア語、エスペラント（原作）、フィンランド語、フランス語、ハンガリー語、日本語、ポーランド語、ロシア語、スウェーデン語、英語 で読めるようになっている。エスペラントの原作は7ページに収まる戯曲である。 <http://harold-brown-author-verkisto.webs.com/playsteatrajxoj.htm>



ホームページ画面から

編集後記・ 去年中に出すべきでしたが、発行が遅れました。

次号は3月の総会前には出したいと思っています。原稿をお寄せください。

「センター通信」編集：山田義